

林勇蔵の決断に呼応して吉富簡一は山口で応援を呼びかけ、志ある青年たちが長寿寺（山口市荒高）に続々と集まってきました。ところが要の頭がいまません。吉富簡一は井上聞多以外に総督を任せられる人物はいない…と、聞多の実家に懇願します。兄は、「突然押し入り強奪した」という形でならと容認しました。一芝居うったわけです。

あの辻斬りで瀕死だった9月から数えて約四カ月後のことです。おそろべし回復力…。井上聞多はここからまた第一線で活躍を始めます。

そして、鴻城軍は、佐々並（萩市）に居た政府軍（保守派）を襲い、これが革新派勝利の大きな一手になりました。2月15日、革新派が萩城下を取り囲み、保守派は失脚し内戦は終結しました。このあと藩は革新派の意思「武備恭順」を藩論に定め、幕府との戦いに備えて準備に入っていきます。



鴻城隊総督にまつり上げられ、進軍する井上聞多



長崎でグラバーに会い、小銃を購入する聞多と博文

このころ朝敵となっていた長州藩は、外国との貿易が許されていませんでした。このため薩摩藩名義で鉄砲や軍艦を購入し、着々と幕府との戦いに備えていきました。これは坂本龍馬が薩長同盟で和解を進めてくれたからです。藩政をとる木戸孝允の命令で、長州ファイブで渡英した経験で英語が堪能な井上聞多と伊藤博文が長崎へ派遣されました。イギリスの商人グラバーと面会し7700挺の小銃を購入、これが四境戦争で大活躍します。

## 第4回 東日本復興支援コンサート in 菜香亭

### 虹のかなたへ

3月14日（土）菜香亭大広間で「第4回東日本復興支援コンサート in 菜香亭」を開催しました。



源の助さん

最初のステージは源の助さん。仙台出身の大阪育ち、高校生のころからバンド活動を始め、大学生活で山口に縁があり、今は美祢市でアジアンカフェ・まなまなを営みながら、音楽活動を継続されています。

30年前のチリ沖地震や阪神淡路大震災を経験されており、そんな大変な体験に裏打ちされた声は奥深く癒しに満ちていました。源の助さんの心の拠り所になっているというインドのお話も興味深いものでした。

山口東北人会の服部俊子さんから「忘れない…津波体験」と題して講話をいただきました。幼少のころチリ沖地震の津波を体験。祖父母の教で高台に避難し、難を逃れたとのこと…語り継ぐことの大切さを話されました。未だ約23万人の方々が避難生活をされているという現実や復興への厳しい道のりに聞いてきました。



服部俊子さん

後半、稲葉照美さんのステージ。ジャズシンガーとしても活躍中。震災後、全国的に広まった金子みすずや地元の詩人中原中也の詩をメロディーにのせて…。また、稲葉さんが実際に被災地ボランティアに行かれた際、生まれた曲も披露してくださり、生命の尊さや美しさを感じました。



稲葉照美さん

最後は、源の助さんと稲葉さんのコラボで「虹のかなたへ」。これからも山口から温かい想いを届けていけるようにとの願いをこめて…。

お二人の素晴らしいセッションに大きな拍手が鳴り止みませんでした。



Over the rainbow～のコラボ

## 四境戦争～幕府VS長州…まさかの快進撃

一八六六年6月7日、幕府海軍が周防大島付近を砲撃し、四境戦争が始まりました。大島口（山口県大島郡）、芸州口（広島県境）、石州口（島根県境）、小倉口（下関海峡）の四か所の県境で激しい戦いが始まりました。井上聞多は芸州口で参謀として戦いました。



x…… 四境戦争の激戦地

四境戦争は、のちに日本陸軍祖となる大村益次郎が采配をふるい、幕兵の十分の一の兵で最新鋭の武器と洋式の戦術を用い幕府軍を圧倒しました。

同年8月21日、幕府の密使として勝海舟が広島へ着きました。幕府が長州藩に止戦を申し出たら受け入れられるようにとの交渉でした。長州藩から、広沢真臣を代表とし、井上聞多、御堀耕助が出席しました。直後幕府は撤退をはじめ、長州藩も追撃することなく、四境戦争は終結を迎えました。



三条実美ら五卿とともに上京する井上聞多

天皇を中心とした新たな国造りの始まりが告げられました。戊辰戦争直前に井上聞多は帰京を許された五卿とともに上京し、その後国政に関わっていきます。

同年10月14日には大政奉還があり、徳川幕府体制が終わりました。その後は王政復古の大号令により、

コンサート来場くださった皆様から頂いた寄附金は、  
総額 **51,140円**

となりました。全額「ふくしまこども寄附金」に寄附と山口東北人会にお預けして復興支援に役立てていただきます。

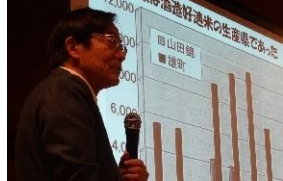


非常持出品を紹介「さばらんて」のご協力による

## 第6回 山口地酒の楽校

### なぜ地酒は元気がなくなったのか

2月28日（土）夜、大広間で、第15回美味しんぼの会「第6回山口地酒の楽校」なぜ地酒は元気がなくなったのか」を開催しました。



日本酒は一九七五年をピークに生産量が減少の一途をたどり、現在はピーク時の三分の一まで減りました。しかし山口県の日本酒は、昔は評価が低かったのに、5年前より生産量が増加に転じました。現在売切れが続

出しており、入手困難の幻の酒もあります。

なぜこのように地酒は元気がなくなったのか。そのことについて学びました。講師は、長年山口県産業界技術センター研究員を務め、40年前から地酒の衰盛を見守ってきた柏木亨さんです。

県内の酒造会社はピーク時120社あったのが20社に減っています。もともと県外の大手の酒造会社の下請けとして造っていた会社が多かったのですが、近年は自らのブランドで地酒を造る会社が増え、新酒品評会でも受賞数が出るようになるまで評価が高まりました。

地酒が元気になった理由として、酒米の作付を酒造会社自らが推進してきたことや、技術センターが他県の最先端技術の紹介や酵母の開発を行ったことを挙げられました。会の途中からは8種類の地酒を試飲しながら、その酒についての特性などを伺いました。

山口県のお酒の魅力と、それが産みだされる苦勞を知った会となりました。

